熊本・徳永直の会会報
第４３号

徳永直文学碑を守ろう

四月の半、突然ある不動産業者が訪ねて来た。曰く、徳永直の文学碑をすぐに取り払ってもらいたいと。何故なら、あの土地の所有者が倒産して、あの土地が他へ売却されることになったから、買い手があんな変な物があると邪魔だと言っている、というのだった。そんな馬鹿なことが、と私は絶句した。そしてやっとのことで、それは出来ない相談ですと答えた。不動産業者は、かなり強い口調で移転を迫った。私は、文学碑なるものは、そう簡単に移せるものではない、ということを説明した。文学碑などは普通の建造物とは違って、文化財的価値が付随しており、いろんな文献等にも紹介されている、いわば公のもので、個人的な行為は施されないものなのだと。そしてまた、徳永直文学碑建立に関する小冊子、これは建立発起人代表高光義明氏の文になるものを渡した。それには次のような箇所があった。以下部分引用、「そこへ井上栄次さんが耳よりな話を持ち込んで来た。立田山の登山口の竹藪に良い場所があると云うのである。映画劇場『東映』や『東雲座』の経営者である寺崎フサエさんの亡夫が、戦後財産税に追われた細川家から買受け養老院か保育

裸にされた徳永直文学碑

園を計画していたが、その後県から『風致地区』の指定を受け竹一本切るにも県の許可がいると云ふ厄介な処になっていた。『個人の私有地を一方的に自由に出来ない様にして、税金をかけるとは不合理だ』と井上さんが市当局に掛合って固定資産税を免除させた所だ、という。旧友会員の福田政雄さんも寺崎さんの顧問弁護士を引受けていると云うことも分った。

早速井上さんが交渉すると『そんな有意義なことなら』と二つ返事で無償使用を快諾して貰った。風致地区の現状変更については県議の井上栄次・吉良敏雄両氏が県当局に当り、県は計画係長を派遣して実施を調査、内諾を得た。――かくして敷地問題は一挙に解決『文学碑建立』運動の第一歩を踏出すことになった。」

徳永直文学碑建立についての様々な話題は、前記故高光義明氏の「徳永直文学碑登場」をお読み戴きたい。

ところでその後どうなったか。不動産業者との話し合いを続けながら、熊本市の関係窓口との交渉、諸会合での保存の訴え、県文化協会理事会での現状報告、勿論、熊本・徳永直の会役員会での協議と、いろいろ対策を考慮中であった。ところが七月末のある日、一市民からの電話で、背景になっていた竹が全部伐り倒されている、との連絡を受けた。その翌々日であったか、私はその現場写真を撮りに行った（掲載の写真）。

「竹一本切るにも許可がいる」「風致地区」なのに、なぜそんな無法なことが許されるのであろうか。「風致地区」なる法は、全くのザル法なのであろうか。

折も折り、小泉八雲ゆかりの地蔵堂が、天草の御所浦に引越すという話が飛び込んできていた。しかもこれは緊急なことであった。こちらは地元紙と多くの市民が、反対運動に立ち上がったため、現状に落ちついた。徳永直文学碑の竹藪伐採は「孟宗忌」の名にとっても痛いことである。しかし、この二つの文化財的存在の危機は、共通の精神的環境のもとに起こった事件と見るべきではなかろうか。腐敗しきった物質文明は、精神的なものを踏みにじっても何の後ろめたさも感じないまでに、私たちの周囲に押しかけてきていることに気付く時ではなかろうか。

私は訴えたい。文化財的なものに対する市民の関心の高まりを。文化財は金で売買される性質のものではないことを。土地私有化の問題を根本的に考えてもらいたいことを。行政にたずさわる人々の、文化意識の高まりを。

（中村）

その後の成り行き

行政の窓口とも相談しながら、移転先き探しをはじめた。一番いいのは隣地の泰勝寺境内である。次にリデル・ライト記念館敷地内を考えたりした。立田山山麓という、すでに公になっている場所内でなければならなかった。それに孟宗忌のいわれで、背景に孟宗竹林がなければいけなかった。

ところが、まだ実動にはいらない前に、先の不動産屋から次のような申し入れがあった。移転はしなくてもいい。あの土地を公園として市当局に買い上げてもらうよう協力して欲しい。そのための第一歩として徳永直の会名で熊本市長宛に「陳情書」を提出して欲しいというのであった。それはこちらも願っていたことなので、「熊本市文学碑の森公園」構想の陳情書を提出した。以上がその後の経過である。

メッセージ

前世紀の遺物の戦争の悪夢を、美しく装飾しようと懸命になっている一団がいます。曰く「誇りのもてる日本人の歴史物語」などと。

前世紀にアジアの人々は、このことをきっぱりと拒否しています。新世紀に、アジアの真の友人となるには、私たち日本人が歴史の反省と平和への道を進むことしかありません。

徳永直を新世紀に読み直し、徳永が作品に込めたそのメッセージを今一度よみがえらせる必要がありましょう。

孟宗忌に参加された皆様に、距離は離れていてもその思いは近い登米の地から、新世紀のご挨拶とさせていただきます。

新世紀の孟宗忌に栄えあれ！

二〇〇一年二月一二日　佐藤三千夫記念会

二十一世紀こそは、平和の世紀であらねばなりません。しかし、現況は暗い。国内外、相も変わらずキナ臭い空気が漂っています。一体これは何なのか。人類は、かくも愚かなるものか。日本人は、かくも狭小なるものか。人類の哀しみは、「国家」という塀をめぐらしたときから始まる。もうたいていで、「国家」なる壁は壊していいのではないでしょうか。

佐藤三千夫は、狭小なるナショナリズムを超えて、インターナショナルな行動に出ました。私たちがこれから学ぶべきものは、佐藤三千夫のインターナショナルな人類愛の精神であり、行動であろうと思います。

佐藤三千夫第二〇回呑牛忌に際して、人類の幸福のために貢献することを、ともに誓いましょう。

二〇〇一年五月四日　熊本・徳永直の会

第24回孟宗忌は雨降る

二月十二日、第24回孟宗忌は行われた。雨は止まなかった。後に起こった寝耳に水の前兆でもあったのだろうか。朗読は「白い道」の末尾部分を矢部絹子さんが担当した。報告では小田切秀雄、本多秋五、藤森司郎、柴田徳義の各氏の訃報があり、ことに直の従兄弟で本会に物心両面ご援助いただいていた宮崎政喜氏の訃報が同夫人からもたらされた。偲ぶ会は食堂「まさ」に移り盛会であった。折しも前進座の「赤ひげ」公演の直前とあって、座の広報係りの女性の参加もあった。

宮内俊介氏の死を悼む

掛け替えのない人を失った。七月二十四日突然の死であった。会にとってもこんな痛手はない。彼を軸に直作品の読書会を始めようとしていた矢先のことであった。次の文は会への遺言となった。

前略

今日は失礼しました。孟宗忌・偲ぶ会に出掛ける予定でいましたが、大事を取って家で休んでいました。というのも、昨晩、突然の腹痛があったからです。我慢出来ず、市民病院に駆け込みました。心配した腸閉塞ではありませんでしたが、腸捻転に近い状態で、八時から今朝の三時迄、点滴をしたりしていました。死ぬかと思う程の痛みで七転八倒している中、定番の血液検査、そして腹部のX線・CTと検査をこなしました。結果として最悪の状況（血管の閉塞で、その場合も即座に手術ということのようです）では無いことが分かったのですから、検査には感謝していますが、それにしても、という感は残ります。それは兎も角、そういったような訳で、明日の入試業務を横目で睨み、今日は一日家で静かにしていました。

生憎の雨でしたが、何時もの皆さんが集まり、盛会だったことと思います。先日、「会報」を拝見して、矢張り読書会を始めなければ駄目だと思いました。『徳永直短編選集』の残部があれば、それを使って、もし残部がなければ、会員各々が古書を手に入れて。先ずは二月に一回でしょうか。仕事を持っている人もあるでしょうから、夜か、或いは土曜か日曜を使って。それから、本を手に入れられない会員もあるでしょうから、「徳永直の会」で古書の斡旋をすれば何うでしょうか。古書代金の一割の手数料を上乗せして「さろん・ど・漱雲」に置いておき、購入して貰うという案は何うでしょうか。そのような活動を「会報」に紹介して積み重ねて行けば、いずれ著作権継承者を説得することも出来るようになると思います。

年末の会で何かの話が出たのかも知れませんし、今日出席すれば、又、色々な話が出たのだろうと思いますが、十八日の大橋さんの会には出席の予定ですから、その節には色々とお話を聞かせて戴ければと思います。

一昨日でしたか、朝は零下二度でした。そして、昼間はポカポカ陽気。この気温差には何時も驚かされます。御自愛下さい。　草々

二〇〇一年二月一二日

中村青史先生

宮内俊介

事務局だより

▽孟宗忌報告もあり、四月には少なくとも発行するつもりだった会報である。文学碑移転という突発事が起こったことも遅れの原因であったが、何としても編集発行人の責任である。次の孟宗忌がすぐ来る。

▽関係ある多くの人の訃報に接した。宮内氏を除いて大半は高齢者である。会員の若返りの必要さをつくづく感じる。

▽宮内氏の遺言に従って、直作品の読書会を是非開始したい。はじめは二人でも三人でもいいではないか。とにかく始めねばと思う。

▽会員制もいいが、特別会員もお願いして経済基盤を確かにしたい。

熊本・徳永直の会　熊本市北千反畑町五－一三　さろん・ど・漱雲
〒八六〇－〇八五五　ＴＥＬ・ＦＡＸ〇九六－三四三－〇〇七二
郵便振替　〇一九四〇－二－一一四九八

印刷所　㈱昭和印刷　三四四－五二五一・三四三－三八八六